

「劣等生の「邂逅」

松村 興延 陸自 64

はじめに

春分の日の翌日、編集委員から電話を頂いた。「偕行社常勤の調査員・大東信祐氏（筆者の防衛大学校学生時代の指導教官）が、3月一杯で常勤を退かれ、週1日の勤務に移られる」との知らせ。元編集委員に連絡を頂いたのは、「駐屯地シリーズ」の取材間に、大東教官から懇切丁寧な指導を頂いている状況を承知していたからであろう。

防衛大学校第1期生 小原台に着任

廻ること50余年、筆者が防大第2学年の時、第1期生が母校に指導教官として赴任されるとの噂が流れ、学校職員始め、学生たちの関心が高まった。



「初めて同窓の先輩が着任されたら、学生生活は厳しくなる」と多くの学生は緊張したのである。

そしてその予感は的中した。新任の指導教官方の怒声は滅多に響かなかつたが、学生達の近くに屢々現れる機会は目に見えて増えた。学生達の課業行進では歩調が揃い背筋が伸び、指揮学生への教官への敬礼は気合いが込められていった。

だが教官方の答礼には、それ以上の気迫がこめられていた。その最もこもっていたのが、我らの指導教官大東信祐指導教官であった。まるで「青年将校は如何に振る舞うかは、我を活模範とせよ」とばかり、常時姿勢正しく闊歩され、指導を繰り返す姿に間もなくニツクネームが付けられた。

「軍神大東信祐」。実に言い得て妙であったと思う。その厳しい雰囲気の中に暖かい血が流れていることを、多くの学生は気づいていなかった。

過ちを犯した学生が破廉恥ではない限り、救い上げておられた。このことは、筆者自身が該当者であり、間違いない。

過ちの詳細は、恥ずかしくて文字に出来ない。青春の暴走から大事な部隊実習に参加出来ない事態に陥ったのである。その他にも、救われた学生があつたと聞いている。

叙情の一時、軍歌演習と戦史講話

防大学生の定期訓練は、北富士・東富士演習場の舎営で行われた。課目は「組戦闘」など基本的なもので、体力的には厳しいものの、特に述べるほどではなかった。この訓練に付随して、

筆者の記憶に焼き付けられた情景が二つある。

一つは軍歌演習。訓練を終えて日没迫るころ、廠舎へ辿る途中で歌う軍歌は、叙情に満ちたものだった。

防大の学生が、歌詞の始めから終わりまでそらんじていることは先ずない。教官が一節ごと歌い、その後を学生がなぞるのである。

曲名は「ああ我が戦友」「四条駿」「麦と兵隊」等、不思議にマイナー曲が多かった。短調の曲は、日本人の心の底まで染み通る情緒があるらしい。

二つ目は、帝国陸軍将兵奮戦の歴史講話だった。その中に、今でも教官の息吹まで思い出させる激戦の話があった。諸賢君存知の金光恵次郎少佐以下、

拉猛守備隊の玉碎に至る奮戦である。少佐が弾薬・糧食絶える状態にもかかわらず、上級部隊に打電した電文の一節は、「物資空中投下で対空砲火を衝

いての低空飛行には感謝の他ない。しかし無理をされぬ様」との内容だった。

この電文を紹介する教官の声は、肖闇の中に湿って響いていた。

大東教官は訓練以外にも、帝国陸軍の武士の魂を学生に紹介し続けておられたが、間もなく指揮幕僚課程の学生として、小原台を後にされた。

細くても師弟の絆

筆者が防大を卒業した後、教官に直接お会いした事は2度しかない。

1度目は昭和46年頃、教官が陸幕の幕僚として資料収集のため東北方面隊を巡回された途次、仙台霞日飛行場に立ち寄られた時である。筆者が教官の教え子であった事を聞きつけた航空隊上層部は、飛行場出迎え幹部の末席に連なるよう指示したので、管制塔の前でお待ちした。末席に並ぶ筆者を見つけ、歩み寄られた教官から、久しぶりに激励の言葉を頂いた。

2度目は、筆者が陸幕航空運用班勤務の時である。上京された教官とお会いし、この時も激励の言葉を頂いた。直接お会いしたことはないが、心に充つる発言に感動したことを紹介したい。大東教官がその後業務学校長であられた頃、筆者の航空管制業務の先達で、小平駐屯地広報室長として駐屯地司令である大東教官にお仕えした偕行会員の鳥田修氏陸自67から伺った話である。

「これほどお仕えし甲斐のある上司はいなかった。軸足は自衛隊と駐屯地に置いて揺るぎなく、私情や個人的好みは全くない。また部下のまとめた作業に親身になって耳を傾けてくれる」

同じ趣旨のコメントを、当時、業務学校研究部に勤務した筆者の同期生・大島紘二氏からも聞いた。嬉しかった。しばらくお会いしてなかった大東教官との間の「絆」を感じたのである。

甦った師弟の絆

筆者が再び教官から濃密なご指導を頂いたのは、偕行編集委員になり「駐屯地シリーズ」の取材に参画した時である。浅学非才の身には記事内容についての奥行きが必要で、靖國偕行文庫は絶好の資料収集先であった。そこに大東教官（筆者にとっては、終生教官であり、こう呼ばせていただいている）は図書室長として勤務されていた。以来資料紹介、資料の読みとり方など、丁寧にご指導を頂いた。

ここで目にしたことは、教官が英霊を深く敬仰され、そのご遺族縁者にひとかならぬ思いを寄せておられた姿であった。縁ある英霊の終焉の地や奮戦の様子を、是非知りたいという全国からの問い合わせに応えるべく、防衛研究所戦史部、靖國偕行文庫、厚生労働省等の資料を渉獵され、調査・回答に尽力されていた。

その様子は、如何にもご多忙であられた。その様な奉仕の多忙さにもかかわらず、筆者も食らいつくようにして、教官の大事な時間を頂戴した。ご迷惑をかけたと思うと、慚愧に堪えないのである。

我が最大の「邂逅」

高校時代に学んだ言葉に、「邂逅」がある。確か小林秀雄氏の文中に展開された概念で、単純な巡り会いではなく、精神、思索、人格形成などを伴う機会を得ることを意味していた。

筆者の独りよがりかも知れないが、大東教官から「邂逅」の機会を頂いたものと考えている。その始めの防大では、教官と学生の関係で、筆者は多くの学生の一人にすぎなかった。

その後50年かけて漸く「邂逅」という境界」に到達し得たと感じている。だが省みることがある。教官の教え子には多くの俊才がいて、国の守りに活躍された。その方々も教官との間に「邂逅」の境地を得られた方がいるはずである。筆者如き鈍才・劣等生が教官との「邂逅」を一文にするのは身の程を弁えぬ僥倖であるかもしれない。

しかし、老境に入り武蔵野の一角に日々を送る筆者にとって、教官から頂いた「邂逅」は、かけがえない宝である。